

〈遠き〉へむかう〈こころ〉

——室生犀星「小景異情 その二」——

宮崎 真素美

そして「私のふるさと」は端的に存在しない。なぜならそれは、失われたものとして生まれたのだから。

(傍点原文のまま)

西谷修^①は坂口安吾の「ふるさと」について論ずるなかで、「ふるさと」という概念がはじめから持つ二重性について、このように述べる。

「人がそこを離れるとき事後的に、それも二重に生まれるもの」であるそれは、空間よりも時間の不可逆性に拠っている。「内面」の主観的「ふるさと」と、外的現実と客観的に規定されている「ふるさと」とは、「私」の過去の「ふるさと」の幻影と残滓でしかない。その「非在性」が「純粹な言葉」としての存在を取り戻させ、「虚構」の本然の姿を見せ、「文学」はそこから生まれる」と指摘する。

これまで、多くその創作の場(空間)について言及の重ねられてきた室生犀星の「小景異情」、なかでも、〈ふるさと〉は遠きにおいて思ふもの^②で知られる「その二」を考えるうえで、この視点は示唆に富む。作品世界にあらわされた〈ふるさと〉と〈みやこ〉を現実の場に還元するのではなく、ふたつの想念のあいだを往き来する〈こころ〉のありように目を向けてみたいからである。

1 〈都〉と〈みやこ〉 初出・再録形

ふるさととは遠きにありて思ふもの／そして悲しくうたふもの／よしや／うらぶれて異土の乞食^{かたな}となるとても／帰るところにあるまじや／ひとり都のゆふぐれに／ふるさとおもひ涙ぐむ／そのこころもて／遠きみやこにかへらばや／遠きみやこにかへらばや (「小景異情 その二」『抒情小曲集』大7・9)

詩集収録形にあらわれるふたつの〈都〉(みやこ)は、初出形〔朱
 轡〕大2・5)と再録形〔感情〕大5・7)では、ひとつの〈都〉
 であつた。それについては、これらをふくむフレーズの他の改変部
 分とともに考える必要があるだろう。詩集収録形の〈ひとり都のゆ
 ぶぐれに／ふるさとおもひ涙ぐむ〉は、初出・再録形では、その後
 半をへふるさと思ひなみだぐむ)として、(おもひ)〈涙〉の漢字仮
 名表記を逆転させていた。また、詩集収録形の末尾三行は、特に最
 終二行(遠きみやこにかへらばや)のリフレインが際だつ配置となつ
 ているが、初出・再録形では(そのころもて遠き都にかへらばや
 ／とほき都にかへらばや)として、それらが二行に収められ(都)
 にかかるそれぞれが、〈遠き〉(とほき)と書き分けられていた。

今井文男^③はこの点について、「都」と「みやこ」の書き分けの問
 題は、しかし大したことではないとし、「もしも意味があるとすれ
 ば印刷したツラの上での問題だと考えた方がよい」とする。そして、
 「問題は、なぜ「遠き」としてそれを強調しなくてはならなかったか」
 にあるとして、冒頭行の「遠き」がここに返照している、「ふるさ
 とを思いおこす場所は遠くでなければならぬ。それで、思いおこ
 す場所としての「みやこ」を遠いものにしたわけだ」と説く。さら
 に、「かへらばや」の「帰る」は、「帰るところにあるまじやの「帰
 る」と同じ語彙である」とし、「そのころもて」の一行によって「故

郷と東京とが心のなかで位置を転換した」と読み、「遠きみやこ」
 が東京を指すことは明瞭」と結論づけている。

表記の書き分けに重きを置かない今井論では、〈都〉(みやこ)と
 同様に、〈帰る〉(かへる)も「同じ語彙」として受けとめられてい
 るが、一篇のなかにおいても、また、先にふれたような初出・再録
 形からの改変をあわせて見ればなおのこと、「同じ」と言い切るのに
 は躊躇を覚える。ただし、後に述べるように、冒頭行と最終二行の
 リフレインにおける〈遠き〉の響き合いに関する指摘は、〈みやこ〉
 が東京であるか否かはさておき、重要である。

本多浩^④は、初出・再録・詩集収録形の異同について、「犀星の故郷
 に対する感情の変わり方」にその理由を見る。初出形六行目と最終二
 行の〈都〉はいずれも「東京」を指しているのに対し、詩集収録形
 で改変された最終二行の〈みやこ〉は「故郷金沢」を指しているの
 だとし、「抒情小曲集」刊行の時点において故郷は「美しい懐かし
 い」帰りたい場所であつたために、「同じ詩の中で「都」がある時
 は東京を、ある時は金沢を示すことは無理が生じてくる。そのよう
 に「都」と「みやこ」を意識して犀星は区別をしたことは否定でき
 ない」と指摘し、これを「厭郷を歌うことによって厭離させたいも
 のへの愛着が強烈に浮かびあがってきている」「厭郷の詩」と捉えて
 いる。

東京と金沢というふたつの実在の場に還元されながらも、〈都〉と〈みやこ〉の書き分けによって、異なるふたつの存在が架橋されるように浮かびあがってくる指摘は興味深い。

市川浩昭⁵⁾は、本多論と同様に詩人の心境の推移を見るが、詩語は現実に還元されることなく象徴的に捉えられている。犀星にとつて「ふるさと」は「故郷と詩のふるさと」であり、「都」は「現実の生活象徴」し、「現実の苦しみ」が投影されているのに対し、「遠きみやこ」は「心に描いた理想の「みやこ」」、「詩の「みやこ」」であると説いた。そして、「犀星の内面において、「ふるさと」と「みやこ」は詩への希求という視点において同質の存在として認識されていると思われる」と指摘し、そこに、次のような心境の推移を推測する。

詩集「抒情小曲集」を上梓する際に、すでに創作時における意識を過去のものとして相対化し得ることができた犀星が、自身の過去を振り返り詩に憧れ、詩人になることを夢みたその姿を、その理想を「ふるさと」という言葉に見出だし、彼が求めた理想の「みやこ」との間に対立ではなく相関関係を見出した時に、創作時に気付かなかった犀星自身のイメージの二元性に気が付いたのであろう。

ここで指摘されている〈ふるさと〉と〈みやこ〉の重なり合いは、〈都〉との書き分けを考えるうえで、実に重要である。

対して外村彰⁶⁾は、この〈ふるさと〉と〈みやこ〉にはじかれ続ける詩人の心象を、次のように指摘した。

かつて憧れた〈みやこ〉はこの魂に対し苛酷な現実として立ちただかっていたのであろう。そうして〈ふるさと〉もまた、かねて魂の痛みに安息など与えることはなかった。これから再び遠い〈みやこ〉で暮らすと思われる詠み手は、屈折した情念の中から非在の〈ふるさと〉像を切実に希求しようとしているわけである。

両者にはじかれながら、「〈みやこ〉で暮らすと思われる詠み手」が「非在の〈ふるさと〉像を切実に希求しようとしている」ことで、「〈ふるさと〉と〈みやこ〉は牽引し合う存在として受けとめられている」。

このように実在の場の確定を結論とする論、そして、象徴的な存在としてそれらを捉え、相対するイメージを重ね合わせてゆく論とを見ることができ、これらを次のように融合的に捉えた指摘に、早く関良一論⁷⁾がある。

私はいま「故郷に対する浪漫的アイロニー」と記したが、厳密に言えば、「ふるさと」＝金沢は「ふるさと」であって「ふるさと」ではなく、逆に、「かへらばや」という志向の対象である「遠き都」＝東京は、「ふるさと」でなくてしかも「かへる」べき「ふるさと」である——ので、その二律背反の二律背反をうたっている点のみごた。この詩は繰り返しが多いが、繰り返しが多いということは、実は、複雑な心情を単純化してうたい得ていることでもある。

表記を〈都〉に統一していた初出・再録形においても、一篇のなかで、〈都〉はその質を変化させていたことに注目したい。述べたように、初出・再録形では、末尾でくり返される〈都〉に、〈遠き〉と〈とほき〉が使い分けられていたのであり、それらは詩集収録形のうりにリフレインが際だつように配置されてはいなかった。冒頭行の〈ふるさとと遠きにありて思ふもの〉、その〈思ひ〉の内実として、〈ひとり都のゆうぐれに／ふるさと思ひなみたくむ〉（〈ころ〉）、〈そこころもて遠き都にかへらばや〉というながれは、最終行の〈とほき都にかへらばや〉によって、冒頭行の〈遠き〉との対位を超えた距離感が生み出されている。先掲の今井論が述べるように、詩集収録形では、冒頭の〈遠き〉と最終行の〈遠き〉が響き合うのだが、

初出・再録形においては、このような〈遠き〉と〈とほき〉の使い分けによって、〈ふるさと〉との対位を遙かに超えたかみえる〈とほき都〉が描かれていたのである。加えて、〈帰る〉と〈かへらばや〉の書き分けは、初出・再録形の段階でもなされており、それが、詩集収録形にも継承されている。つまり、〈帰る〉と〈ころでない（ふるさと）〉と、〈かへり〉たいところである〈都〉とは、〈遠き〉と〈とほき〉と同様に、ずらされている。

2 詩集収録形

詩集収録形では、すでに述べたように、冒頭行と末尾二行のリフレインの対位が際だつ配置がとられた。ここでは、〈都〉と〈みやこ〉の書き分けがなされたかわりに、初出・再録形でなされていた〈遠き〉と〈とほき〉の書き分けがなくなり、〈遠き〉に統一されている。つまり、〈ふるさと〉への距離感と〈みやこ〉へのそれとが、同じ〈遠き〉ものとして描かれることになったのである。では、それらは先の市川論の指摘にあるように「同質の存在」となったのであろうか。あるいは、外村論が指摘するような、牽引される関係となったのだろうか。ここで注目したいのが、〈帰るところにあるまじや〉の助詞〈や〉に着目した庄司肇の指摘である。庄司はこの〈や〉を次のよう

に解釈する。

ほかは、疑問から逆転、否定、肯定というような屈折の流れを想定するのである。帰ってはいけなところ、そのはずだけど、まあ、帰ることになっても仕様がないのではなからうか、だってふるさとなのもの、というふうに屈折迂曲すべきところではないかと思う。単純に言い切ってしまったら、世間並の「追慕」の詩句ではないかと思うわけだ。でなければ、そのあとにくる《ふるさとおもひ涙ぐむ》と釣り合いがとれず、うまく照応しないような気がする。

庄司論が助詞〈や〉において指摘する、徐々に和らいでゆくような感覚は重要だと思われる。述べてきたような初出・再録形から詩集収録形への詩句の変化にもなっており、特に、詩集収録形一篇にわたって同じような感覚がながれているように思われるからである。庄司が着目するこのフレーズは、一篇のちょうど中ほどに位置している。冒頭二行で〈遠きにありて思ふもの〉悲しくうたふものとして定義される〈ふるさと〉は、このフレーズののち、〈都〉で〈おもひ涙ぐむ〉ものへ、〈思ひ〉は〈おもひ〉へ、そして〈こころ〉へと溶け出してゆき、〈都〉はついに〈遠きみやこ〉へと変化する。も

はや〈みやこ〉は、〈ふるさと〉でも〈都〉でもない。先にも述べたように、初出・再録形以来踏襲されてきた〈帰る〉ところでない〈ふるさと〉と、〈かへりたい〉〈みやこ〉との書き分けは、ここにおいて〈遠き〉によって対位されることで、詩人にとっては、そのどちらも〈遠き〉存在であることが強調されることとなった。つまり、詩人はそのどちらにも位置しておらず、その在所が不確定であることに意味がある。この不確定さこそが創作という行為を支えているように思われるのである。

まず、詩人にとつて、詩集『抒情小曲集』の世界が仮構されたものであるという当然の姿勢に留意しておく必要があるだろう。詩集に収録されている「抒情小曲集」覚書」における「年譜」では、詩人自身によつて「二十歳頃より二十四歳位までの作にして、就中「小景異情」最も古く、「合掌」最も新しきものなり。」とされているが、これについては、すでに安宅夏夫が「犀星の記憶違い」として、正しい最古最新の詩篇と、実年齢とを指摘している。続く「創作地」では、「郷里金沢市千日町兩宝院といへる金比羅神社」にはじまって「犀川」、「医王、戸室の山」というように、金沢の風景が描き出され、「目次」では、件の「小景異情」を巻頭とする「一部」には「故郷にて」と付されている。ところが、詩集出版に先立つこと五ヶ月前、詩人は当該詩篇を「都」「都会」で創作したものととして、次のように

述べている。^⑩

この作は、私が都にゐて、ときをり窓のところに佇つて街の騒音をききながら「美しい懐かしい故郷」を考へてうたつた詩である。(中略)

しかし自分は帰りたくない。自分は強大な生きた姿で此都会にありたい、自分が見搾らしくよし乞食となつてもかへつてはならない。

まこと故郷はただ遠方にあつて思慕するところである。かへつては最つと寂しく悲しいことが多いことだらう。自分はやはり此の都会にゐたい——大意はこの心持を体したものである。

(傍点原文のまま)

だが、詩人の創作地をめぐる言辭はこれに留まらない。久保忠夫とのやりとりとして、次のようにある。

「この詩はどこでおつくりになつたのですか」というわたしの間に犀星は「このごろ中学校の教科書にのつているので、先生方からよくそういった質問が来る。ある人には『東京で』と答え、またある人には『金沢で』と答えてしまった。芭蕉の『閑

さや岩にしみ入蟬の声』の『蟬』と同じで、その人がこれぞと思ふ方をとればいいんですね……」と答えてくれた。

対する久保は、「それはそれでいいのだが、わたしは諒承しない」とし、その理由として、「犀星のことは明らかに思わくがからんでいる」としている。先に述べたように、詩篇の世界が実際とずらざれば構築されたものである以上、「思わく」はあつて良い。詩人にとつて実際は問題でないのだということを、これら一連の言辭から汲み取ることが重要なのだと思われる。

つまり、どこへも心の置き所のない詩人のありようこそが、あり得べき安寧の場所を求めつつ、それをことばによつて象つてゆくこと、それが詩篇創作のエネルギに結びついているのだと考えたい。それは、詩人自身が実際にくり返した上京と帰郷の往復運動によつてもたらされた感覚に裏打ちされているものであるのかも知れない。詩篇のなかで、自身の位置がどこからも〈遠い〉場所にあるからこそ、この心の往き来が描き出せるのだらう。〈ふるさと〉も、そして〈みやこ〉も、〈遠い〉からこそ憧れ象ることができるのであり、創作の場を實在の場所に還元してしまうと、こういつた中間的な不確定さが無視されてしまう。詩人が、「その人がこれぞと思ふ方をとればいい」と述べる背景には、どこにも寄り添えない心象こそが

詩篇の核であることを伝えてるように思われてならない。

3 〈かなしき〉のヴァリエーション

「小景異情」が、初出・再録形・詩集収録形のそれぞれにおいて、収録詩篇と配列とにかなりの異同があることは知られるとおりである。なかでも当該詩篇は、初出・再録形でこの詩篇群を締めくくる末尾に置かれていたのが、詩集収録形では、「その二」として組み込まれ、「小景異情」の世界に大きな変化を与えている。ここでは、最終的に整えられた詩集収録形の配列をもとに考えてみたい。

「小景異情」詩集収録形は、全六篇のうち、「その一」から「その四」にいたるなかで、〈かなしき〉のさまざまな側面があらわされている。他所で食さなければならぬ〈ひる鯛〉に出された〈白魚〉の〈さびし〉さと〈しほらしき〉に響き合う〈わがよそよそしきと／かなしき〉(「その一」)は、〈ふるさと〉を〈悲しくうたふ〉、〈ふるさとおもひ涙ぐむ〉(「その二」)へと引き継がれ、次いで、〈銀の時計〉に象徴される喪失感が〈こころかなしや〉(「橋にもたれて泣いてをり」)(「その三」)と形象される。〈涙ぐむ〉(「その二」)でいたるところから、〈泣いてをり〉(「その三」)と、その〈こころ〉はしずかな〈涙〉となつて落ちてはいるが、その〈かなしき〉が〈懺

悔の涙〉(「その四」)となつたとき、そこでの〈涙〉はそれまでのしずかに下方へと落ちるそれとは異なつて、上方へ〈せきあぐる〉ものへと変化している。

さまざまな〈かなしき〉に彩られた世界は、見たように、「その四」で〈緑もえいで〉〈涙せきあぐる〉さまへと変化し、その勢いが、「その五」の冒頭行〈なににこがれて書くうたぞ／一時にひらくうめすもも〉を引き出しているようであり、全六篇のうちで唯一、完全な七五律でつらぬかれたこの詩篇そのものが、冒頭行にあらわれた〈うた〉を体現しているかのようにも映る。〈なににこがれて〉、〈一時にひらく〉といった勢いは、〈けふも母ぢやに叱られて／すもものしたに身をよせぬ〉と、いったんしずかに歌いおさめられるが、それは、続く「その六」で、はるかに強く歌いあげられることになる。〈あんず〉に〈花着け〉〈燃えよ〉、〈地ぞ早やに輝け〉とことばを投げかける「その六」の世界は、それまでとは一変してエネルギーッシュではあるが、〈花着け〉〈燃えよ〉〈輝け〉という祈りは、ことばによつて幻視される風景である。かくあつてほしいという祈りの強さは、その実現の困難も照らし出している。

そしてここに、「小景異情」の世界の特質がよくあらわれている。初出・再録形のように、「その二」が末尾に置かれていた場合も、〈とほき都にかへらばや〉が、すでに述べたように、未発の状態にほか

ならない点で同じである。一方、最終詩篇が「その二」と「その六」とでは、大きく異なる側面がある。それは、一連の詩篇でうたわれた世界から流離しようとする思いと、その世界にかくあつてほしいと言祝ぎ祈る思いとの違いである。詩集収録形の配列が、初出・再録形と一線を画したのはこの点だろう。

述べてきたように、詩集収録形の配列からは、〈かなしさ〉を軸として紡がれた〈こころ〉のながれを見てとれる。このことと、総題にある〈異情〉とはどのように結ぶだろうか。これまでの多くの指摘は、外界や故郷への異和としてなされてきた。「外界の小情景と、それにそぐわぬわが心」、「小景」は故郷の小景¹²（鳥居邦朗）、「外界に異和する心の働き」（今西幹一）、「故郷というその場で」「ナイフのようにつつ立つ」た〈異情〉（月村敏行）¹³、また、「故郷の風土に對する〈異情〉」、「甘酸っぱい感傷が、同時に〈異情〉や禍々しさとしても成立している」という指摘とともに、「文語に對する異和が同時にそれへの執着であり、定型に對する背反が同時に融和」であるのが「抒情小曲」としての〈異情〉（北川透）¹⁵とする見方もある。そしてなかには、「小景異情」は「情景」―感情と実景と―である。ふるさとの実景に催される感動である。「異」とは人並でないことを意味する（久保忠夫）¹⁶という指摘もある。

「その二」にあらわれている〈異土〉（異郷・異国）との対で考え

るとすれば、〈異情〉とは、本来〈ふるさと〉で感じるのではないような気持ということになるか。そしてそこには、六つのフラグメントとしてさまざまにあらわれる、異なった〈かなしさ〉が含意されているのかも知れない。

ここまで、「その二」を中心にして詩人の寄る辺ない〈こころ〉について述べてきたが、この詩篇がひろく人口に膾炙していることから、そこに象徴されている〈こころ〉の普遍性が了解できる。そして皮肉なことに、太平洋戦争へと向かう「翼賛」詩集が、それを逆説的に照らし出すことにもなるのである。日米開戦の半年前、昭和十六年七月に出版された『大政翼賛会文化部編 詩歌翼賛 朗読詩集―日本精神の詩的昂揚のために―第一輯』（目黒書店）には、冒頭に高村光太郎「詩の朗読について」、末尾に岸田国士「詩歌の午後」について¹⁷の二文を置き、島崎藤村「千曲川旅情の歌」、北原白秋「紀元二千六百年頌」、高村光太郎「地理の歌」などをふくむ十二篇の詩が収録されている。「小景異情」はそのうちの一篇として、「その二」と「その五」で編成されている。

「かういふ詩は、純粹な日本語の格調に循ひ、われわれ自身の内から出る言葉によつて、われわれ民族の詩情をうたふのであつて、諸外国とちがった日本語独特の美しさを其処に汲みとることが出来る」、「詩を朗読するといふやうな形式が、人間の精神に知らぬ間に

或大きな滋味と活力を与へるといふことを私は疑はない」（高村光太郎「詩の朗読について」）、「国民士気の昂揚は今や、政治的にも喫緊時とされてゐるが、百千の名士の愛国的訓話は、一回の「地理の書」の朗読に如かぬことは云ふまでもなく、靖国の英霊を迎ふるわれら国民の至情に対し、如何なる高官の弔辞も、教行の「おんたまを故山に迎ふ」る詩片より莊嚴にして感動的な印象を与へ得ないのである」（岸田国土「詩歌の午後」について）。こういった主旨で編まれた本書において、「小景異情」はどのように捉えられているのだろうか。

本書の企図を「詩歌曲の総力戦（傍点原文のまま）と指摘する中野敏男は、「愛国と戦争への決意を人々に強く説く」詩篇群の一方で、「小景異情」のような詩篇群が収録されている理由を、「当代を代表する抒情詩として人々の情感に訴え、日本の自然や人々の繊細な思いに十分な共感をかき立てることで、この国への情動的な一体感を形作るためには不可欠な構成要素とみなされている」とし、本書を「民衆の心情を精一杯動員して戦争翼賛に向かわせるために、優れた詩作品を繊細な感覚で選び出し巧妙に配列した、とても高性能なプロバガンダの一冊」と見ている。

各詩篇に付された「解説（執筆者不詳）は「小景異情」について、「ふるさと」の方は、思ひに思つて故郷へ帰つて来たのに、期待

を裏切られた者の感懐であつて、無論、故郷の地に立つて歌つてゐるのである」としたうえで、「いつそ逆に遠い都会へ帰つて行かうよ」とひらいて見せる。また、「何にこがれて」は、別に名利を思ふではないが、たゞもう夢中で詩を書かずにはゐられない若き日の純情を何としよう。この冒頭の一行には、自ら涙を抑へてゐる者の、殆ど自嘲に近い哀愁が含蓄ふかく高鳴つてゐる」とする一方で、「この純情と自嘲の底には鬱勃たる気魄なし」として、「気魄」を呼び出す。そして、「言葉と言葉との間には飛躍に近い省略があるが、この簡潔な詩形の中に、隠約の妙趣を捉へるべきであらう」と、ふたつの世界を結んでいる。本書における「小景異情」に限って見れば、「涙」や「哀愁」のみには留まらない転換が、一篇のなかに見いだされているようではある。しかし、その主調は中野論が指摘するとおりであり、述べたような（かなしさ）に裏打ちされた寄る辺ない（こころ）が、読む者の多くの（こころ）と響き合う。その共感が、戦争に向かう集団的な統一の基盤へとつながられようとしたのが、この時期の皮肉なありさまであり、（かなしさ）にはかならない。

実在の場を必要としない（ふるさと）や（みやこ）は、詩人にとつて、ただ（遠い）ことが意味を持つ。そして、その実態のない（遠さ）のなかにこそ、読む者は自身の（こころ）をすべり込ませるこ

とができるのだろう。そこには、寄る辺なくたよらない「個」と詩篇との、しずかな響き合いがふさわしい。

注

- (1) 「ふるさと、またはソラリスの海」〔現代思想〕平2・8
- (2) 萩原朔太郎「室生犀星の詩」〔日本〕昭17・4～5)が、この詩を「都会に零落放浪して居た頃の作」とし、〈都〉を郷里金沢と見ているほかは、多くの論者が〈ふるさと〉を金沢、〈都〉〈みやこ〉を東京と見ており、金沢を舞台(あるいは創作地)とした詩篇であるとしている。
- (3) 「室生犀星の詩「小景異情」の考察―表現における場面の構成―」〔金城国文〕昭43・3)
- (4) 「室生犀星ノート―「小景異情その二」について―」〔立教大学日本文学〕昭47・7)
- (5) 「都」から「みやこ」へ 犀星におけるイメージの位相」〔上智近代文学研究〕平1・3)
- (6) 「室生犀星」〔現代詩大事典〕平20・2 三省堂
- (7) 「近代詩評釈53 小景異情」〔国文学〕昭42・9)
- (8) 「近代的自我と「ふるさと」について」〔きやらばん〕平

11・3)

- (9) 「解題」〔定本室生犀星全詩集〕第1巻 昭53・11 冬樹社
- (10) 「新しい詩とその作り方」(大7・4 文武堂書店)
- (11) 久保忠夫「犀川のほとり―犀星『抒情小曲集』」(分銅惇作・吉田熙生編『近代詩物語』7 ふるさととは遠きにありて 民衆詩運動の展開)昭53・10 有斐閣
- (12) 「注二二」〔日本近代文学大系〕第39巻 昭48・6 角川書店
- (13) 「室生犀星『抒情小曲集』の成立とその世界」(二松・大学院紀要)平16・3)
- (14) 「異情」のゆくえ 犀星詩のひらいたもの」〔現代詩読本室生犀星〕昭54・2 思潮社
- (15) 「抒情小曲集」の亀裂―言語革命期の室生犀星」〔日本文学研究〕平3・11)
- (16) 「小景異情」〔国文学〕昭62・3)
- (17) 「詩歌と戦争 白秋と民衆、総力戦への「道」」(平24・5 N H K ブックス)